



# 2026

## 国語

### 注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は㊦から㊧まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学校六年生の「僕」のクラスメイトであるガンリユウ（岩本隆子）は、不器用で人付き合いが下手な性格であった。ある日、そのガンリユウが病気で入院してしまう。「僕」はクラスメイト数人と一緒に、先生に連れられてお見舞いに行くことになった。

病室は六人部屋だった。ガンリユウのベッドはいちばん奥の、窓ぎわ。

ガンリユウはベッドに座って本を読んでいた。病室に入ってきた僕たちに気づいて、顔を上げ、ちょっと照れくさそうに頬をゆるめ、笑いかけたことがもつと照れくさかったのか、また本に目を戻した。

「岩本さん、みんなを連れてきたわよ」

先生は、学校で僕たちに話しかけると同じ口調で、ガンリユウに言った。その隣で、美代子も「ひさしぶり」と胸の前で手を振って笑った。

僕たち男子は、先生の後ろに隠れるような格好になった。前に出て行けなかった。うつむいて、ガンリユウのベッドの脚を見つめる。頬の内側を奥歯で噛んだり、スリッパが足に合わないふりをして、つま先を床に I 当てたり……タケシは、もうどの指も深爪になっているはずなのに、また爪を噛んでいた。

怖かった。帰りたい、と思った。

① ガンリユウは、僕たちの知っているガンリユウではなかった。

先に先生に言われて覚悟していたせいもあるのか、思っていたほど痩せてはいなかった。逆に頬がふくらとして、顔ぜんたいが少し大きくなったように見えた——いまにして思えば顔がむくんでいたのかもしれない。パジャマの上から見るかぎりでは、がっしりとした体つきはそのままだったし、太い眉毛も、鼻の下の産毛の影も、以前と変わらない。

だが、ガンリユウは、六年二組の教室にいた頃とは、どこかが違っていった。「影が薄くなる」というのは、このことを指しているのだろうか。体つきは変わらないのに、雰囲気、絵の具を水で溶いたように薄くなった。淡くなった。ずけずけとキツイことを言っている女子を泣かせ、男子と口喧嘩をするときには「てめー、ぶっ殺す」と平気で言い放つ、ふてぶてしいガンリユウとは違う。

パジャマのせいだろうか。窓からの陽射しがまぶしいせいだろうか。部屋に染みついた消毒薬のにおいのせいだろうか。点滴のスタンドがベッドの脇に置いてあるせいだろうか。枕元の壁に設えた棚に、お茶が少し残った吸い飲みと、小さなスヌーピーの人形が並んでいるせいだろうか。

重い病気だからというので、僕が勝手に思い込んで、決めつけているから——ではないことだけは、わかる。

付き添いのおばあさんにうながされても、ガンリユウは「いま、いいところだから、ここ読んでから」とそっけなく返し、本のページをめくる。書店のカバーが掛かった文庫本だった。僕はまだ本を文庫で読んだことがない。文庫本はおとなの読むものだと思っていたし、同級生でも文庫を学校に持ってくる子はいなかった。ガンリユウはおとなになった。ガンリユウが一人きりで過ごす<sup>②</sup>この世界は、僕たちの世界より早く時間が流れて、早くおとなになって、そして、早く……。

「ごめんなさいねえ、入院してから、すっかりわがままになっちゃったのよ」

おばあさんは申し訳なさそうに言っ、先生と二言三言、話をした。両親だけでは付き添いの手が足りないもので、おばあさんも手伝っているのだという。静岡に住んでいるおばあさんは、わざわざ病院の近くにアパートを借りて、昼間はほとんど毎日病室に詰めているらしい。「親とは違うんで、つい甘やかしちゃうんで、よくないと思うんですけどねえ……」

おばあさんはそう言っ、ガンリユウにまた「ほら、お友だち来てくれてるのよ」と声をかけた。太い眉を不機嫌そうにひそめて「ちよつと待っつて言ってるじゃん」と返したガンリユウは、また文庫本のページをめくる。僕たちにはちよつとも目を向けない。

間が持てなくなった美代子が、先生に目配せして、肩に掛けていたバッグを下ろした。

「岩本さん、クラスのみんなで寄せ書きしたから……」

色紙を差し出されて、ガンリユウはやつと顔を上げた。文庫本を開いたまま伏せてサイドテーブルに置き、ぶすつとした顔でため息をついて、『終わりの会』でプリントが配られるときのよう、片手で色紙を受け取った。

僕もあわてて足を前に踏み出し、「こっちは男子のぶんだから」と色紙をバッグから出した。

ガンリユウは、ふうん、まあどうでもいいけど、という感じで、面倒くさそうに二枚の色紙を膝の上に並べた。

励ましの言葉がクラス全員——三十七人ぶん。みんなガンリユウの体を心配して、早くよくなってほしいと願っ、手術が成功すること祈っている。きれいな言葉だ。誰一人として悪口は書いていない。嘘をついているわけでもない。だが、そこに書いた言葉がぜんぶほんとうなのかと問い詰められたら、僕にはなにも答えられない。きつと美代子もそうなのだろう、いつも自信たっぷりに胸を張ってひとと会

う優等生が、いまは II して、居心地悪そうに、色紙からもガンリユウからも目をそらしている。

「あらあら、よかつたねえ、お友だちがこんな書いてくれて」

おばあさんが嬉しそうに言った。僕たちを見て、にこにこ笑って何度もお辞儀をして、ベッドの上に投げ出したガンリユウの脚を軽くさする。

「タカコちゃん、よかつたねえ、お友だちもみんな応援してくれてるねえ、がんばって早く良くならないとねえ……」

ああ、ガンリユウはタカコっていうんだ、と——あたりまえのことなのに、胸がどきんとした。「ガンリユウ」は六年二組だけのあだ名で、家に帰れば「タカコちゃん」で、この病院でも「ガンリユウ」なんて呼ぶひとは誰もいなくて、だからもうガンリユウは僕たちとは別の世界にいて、二つの世界は、もう交わることはないのだろうか。

ガンリユウは、じっと色紙を見つめていた。寄せ書きの一つ一つを、ゆっくりと読んでいた。なにもしゃべらない。顔をこっちに向けることもない。長い沈黙の時間が流れた。雪が降り積もるように、うつむいた僕の首筋に沈黙の重みが III とのしかかる。

「タカコちゃん……タカコちゃん、よかつたねえ……いいものもらったねえ……早く良くなって、みんなと遊ばないとねえ……」

おばあさんの声は涙交じりになった。よかつたねえ、よかつたねえ、と泣きながらガンリユウの脚をさすりつづける。パジャマのズボンの裾がめくれた。向こうずねが見えた。棒つきれみたいに瘦せた脚だった。

ガンリユウは黙ったまま、 ③ まだ色紙のメッセージを読んでいる。何度か肩を大きく上下させて深い息をつき、そのたびに、頬が少しずつゆるんでいった。

④ 僕は奥歯を噛みしめる。色紙をひたたくって、破ってしまいたくなくなった。こんなもの渡すんじゃないかった、と悔やんだ。ごめん、と謝りたい。もう一度書き直したい。

手を伸ばせば届く。色紙を破ることはすぐにできる。だが、体がこわばってしまっただけで、ただ立っていることでさえ苦しい。ガンリユウは最後に一つ大きな息をついて、僕たちを見た。

「ありがとう」

⑤ そっけなく言っただけで、二枚重ねた色紙を軽い手つきでサイドテーブルに置き、入れ替わりに文庫本をまた手に取って開いた。

「ここだけ読みたいから……」

誰にも訊かれていないのにつぶやいて、一ページめくって、まばたくと、涙が目からこぼれ落ちた。

そのあと、僕たちは病室でどう過ごしたのか、記憶は**あいまいだ**。先生が司会になって、みんなでおしゃべりしたのは覚えているが、なにをしゃべったのかは思いだせない。おばあさんがリンゴを剥いてくれたのは覚えている。テッチャンがトイレに行つて、おしっこの入ったしびんが置いてあったと騒いだことも忘れていない。なのに、ガンリュウがどんな表情を浮かべ、どんなことをしゃべっていたのか、どうしてもよみがえってこない。

記憶に鮮やかに残っているのは、すぼん、と時間が飛んだあと——病院前のバス停のベンチで、駅に戻るバスを待っているときのできごとだ。

美代子が、不意に、しくしく泣きだした。僕たちがびっくりしているうちに、すすり泣きの声は息を継ぐごとに大きくなって、しまいは顔を両手で覆つて泣きじゃくつた。

謝っていた。色紙に描いた鳥の絵のことだった。しゃくりあげながら、切れ切れに、声が漏れる。あの水色の鳩は、やはり、天国に向かう鳥だった。寄せ書きには「早く良くなってください」と書いた美代子は、絵を描くときには、お別れを覚悟していた。病気で亡くなったあと天国に行けますように、という祈りを込めて、鳩を描いたのだという。

「死んじゃえばいいって思ったわけじゃなくて……ほんとに、もしも死んじゃったら、天国に行けたらいいなって……でも、死んでほしいなんて思ってなくて……絶対にそんなの思ってなくて……お願い、信じて……」

ベンチに座ったまま突つ伏してしまった美代子の背中を、先生は軽く拍子をつけるように叩いた。「だいじょうぶ、うん、わかってるから」と拍子に合わせて、やわらかい声で言った。

美代子の隣に座ったタケシは、噛む爪がなくなったので、爪の横の皮をがじがじと齧っていた。テッチャンは一人でベンチから離れて、石蹴りをしている。

僕は足元に伸びる自分の影を見つめる。体が動くと、影も同じように動く。あたりまえのことなのに——<sup>⑥</sup>あたりまえのことだから、胸が熱いものでいっぱいになった。

(重松清『その日のまえに』による)

(注1) 文庫本…小型の本。

(注2) しびん…動けない人が部屋の中で小便を入れるビン。

問一 波線部 a・b の言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

a ずけずけと

- ア 相手を見下すこと
- イ 厳しい口調になること
- ウ しつこくすること
- エ わざと大げさに言うこと
- オ 遠慮なく非難すること

b あいまいだ

- ア 混乱している
- イ はっきりしない
- ウ 間違っている
- エ 存在しない
- オ 数が少ない

問二 空欄Ⅰ～Ⅲに入る言葉としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア ぼたぼた

イ じわじわ

ウ ポンポン

エ トントン

オ もじもじ

カ びくびく

問三 傍線部①「ガンリユウは、僕たちの知っているガンリユウではなかった」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 教室ではなく病院という慣れない場所で会うと、よりいっそう怖く見えるということ。

イ 教室ではキツイことを言うてくるのに、家族の前ではおとなしくしているということ。

ウ 教室とは違う空間で改めて見ると、思ったより迫力がなく、気がないことに気付いたということ。

エ 教室にいるときの強気な態度のガンリユウとは違い、気力がなく弱っているということ。

オ 教室にいたときと比べて頬もふつくとし、ほがらかで優しい印象になったということ。

問四 傍線部②「この世界」とありますが、どのような世界ですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えな  
ます。

- ア 同級生との関わりがなく、幼い子どものまま成長することのできない世界。
- イ 教室とは遠く離れているため、同級生の生活を想像することのできない世界。
- ウ 周囲に甘やかされるあまり、いつまでも現実と向き合うことのできない世界。
- エ 同級生がいる小学校とは違い、一人で孤独こどくと向き合わなければならない世界。
- オ 大人に囲まれている中で、子どもらしくふるまわなければならない世界。

問五 傍線部③「まだ色紙のメッセージを読んでいる」とありますが、ガンリユウがいつまでも色紙から目を離さないのはなぜだと考えられ  
ますか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 今まで強く当たっていたクラスメイトが優しい言葉を書いてくれたことに動揺どうごうし、気持ちの整理がつかないから。
- イ クラスメイトのメッセージがひどく子どもじみていることに心底あきれしまい、返す言葉が見つからないから。
- ウ 普段ふだんあきらかに自分を怖がっているクラスメイトの温かい言葉を信じられず、よく読んでうそをあばきたいから。
- エ クラスメイトが見ている前で夢中になってしまったことに気がつき、恥はずかしくて皆みなの顔を直視できないから。
- オ 色紙の言葉が自分を責めているように感じられ、厳しく接してしまっていた皆に今さら合わせる顔がないから。

問六 傍線部④「僕は奥歯を噛みしめる」とありますが、このときの「僕」の気持ちを六十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑤「そっけなく言って」とありますが、このときのガンリユウの気持ちを四十五字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「あたりまえのことだから、胸が熱いものでいっばいになった」とありますが、それはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言語が消滅しょうめつの危機にさらされる事情は様々です。極端な場合、戦争などで話者が殺されて滅んでしまうという場合もあるでしょう。

I、植民地として宗主国の言語を強制され、自分たちの言語を禁じられて継承けいしょうできなくなるということがあります。しかしその

ように、<sup>①</sup>外からの力が加わった場合だけでなく、<sup>②</sup>話者みずからがその言語を話さないことを選ぶことによつて滅んでいく場合もあります。

日本でも明治以来、方言は標準語よりも低い地位に置かれ、恥はずかしいものであるという意識をうえつけられてきました。特にアイヌや沖縄の人々は就職などでも厳しい差別に直面しましたので、自分の言葉を隠し標準語を話そうとする圧力がはたらいたことでしょう。

社会的により高い地位を持つ言語を話せた方がその人の成功につながりやすいのは確かです。そのため、特に若い世代がより威信いしんの高い言語に乗り換えたり、親が子どもに自分の言語を継承させなかつたりすることがあります。このようにして、地方の言語が衰退すいたいしていくこととなります。

国家の言葉になっていけば、国民がみなそれを学びます。日本語は日本の国語ですし、一億人の話者を数える、世界で十指に入ろうという大言語ですから、すぐに消滅する心配はないでしょう。しかし、<sup>③</sup>英語との関係で見れば、全く安泰あんたいというわけでもありません。

現在、事実上の世界共通語は英語です。ビジネスでも政治でも学問でも、英語が使えなければ世界のひととわたりあつていけない。だから英語を勉強しなければだめだ、と大人にも言われるし、みなさんもそう思うでしょう。なかには、英語圏けいけんに生まれた人は何の苦労もなく身につけた言葉をそのまま使えるのに、自分は一生懸命勉強けんめいしなくてはいけないなんて不公平だ、と思う人もいるかもしれません。しかし現実には現実です。実際、<sup>④</sup>社内の公用語を英語にする企業が出てきたり、一部の大学の講義が英語で行われたりしています。そのぶん日本語が使われる機会は減っているわけです。この流れがどんどん加速していったら、ちょうど平安時代の漢文のように、公的なことにはすべて英語が使われて、日本語はプライベートなおしゃべりにしか使われないという日が来るかもしれません。

ならばいつそのこと、世界中の人がはじめから英語だけを覚えて使えばいいじゃないか、という意見もあります。それも一理あるような気がしますね。日本でも小学校から英語を勉強するようになりました。もっと小さい頃から、国語を全部やめて英語をやるようにすれば、もっと楽に上手に話せるようになるかもしれません。II、たとえばみなんで英語だけを使うようにしても、世界中が全く同じ英語を使うようにはならないのではないかな、と思います。

今も、同じ英語圏であつてもイギリス英語とアメリカ英語とオーストラリア英語は発音や語彙ごいが異なりますし、インドやシンガポール

もそれぞれに特徴的な英語が使われます。これ以外にも第二言語として英語を話す人々が世界中にいて、それぞれに自分の第一言語から影響を受けて、クセや特徴のある英語を話します。Englishes と複数形で呼ばれることもあるように、英語はもはや一つの言語と言いつけないほどのバリエーションがあります。世界に広がれば広がるほど、純粋な形を保つことは難しくなります。

でもこれは無理のないことなんですよね。自然環境が違い、社会のしくみが違い、文化や慣習が違う人たちは、違う言語を必要とするのです。それに、自分の考えや感覚にぴったりくる言葉を探し、それを親しい人と分かち合おうとする時、むしろほかの人にはわからない言葉で通じ合おうとするものです。みなさんも仲のいい友だちと、グループの中でしか通じない言い方をしたりしませんか。若者言葉を一生懸命マネしようとする大人はちょっと鬱陶しいと思ったりするでしょう。言語というのは、バリエーションが生まれていくことが自然なのです。

そうだとすれば、今ある言葉を全部やめて英語に統一してしまうおうというのは、あまり意味のない暴論ではないでしょうか。その土地の言語は、自然や文化と結びついた歴史を背負って存在していて、今生きている人たちの生活によって常に生まれ変わり続けています。一つの言語が消滅するということは、その言語が持っていた広がりや奥行きのある世界がまるごと消えるということです。だから、多くの人が消滅の危機にある言語を何とかして守ろうとしているのです。

『国語をめぐる冒険』より、仲島ひとみ「言葉の地図を手にいれる——そして新たな旅立ちへ」による

- (注1) 宗主国…ある国をまとめたり、守ったりしていた強い国のこと。
- (注2) 継承…引き続いて、受けつぐこと。
- (注3) 標準語…日本のどこでも使える、みんながわかる日本語のこと。
- (注4) アイヌ…昔から北海道などに住んでいた独自の文化をもつ人々のこと。
- (注5) 威信…「すごい」、「立派だ」とまわりから思われる力や信頼のこと。
- (注6) 安泰…安心で、何も心配がなく、平和で落ち着いていること。
- (注7) 公用語…国や地域が公式に使うと決めた言葉のこと。日本では「日本語」が公用語。
- (注8) 漢文…昔の中国で書かれた漢字だけの文章のこと。日本の平安時代では、天皇や貴族が大事な記録やお知らせ、手紙を書くときに漢文を使っていた。

(注9) 語彙：言葉の数や知っている言葉の集まりのこと。

(注10) 鬱陶しい：うるさい、じやま、気分が悪くなるようなこと。

問一 二重傍線部「消滅」とありますが、「消」と「滅」のように同じような意味の漢字を組み合わせた熟語を次の中から二つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 雷鳴      イ 洋画      ウ 無理      エ 大小      オ 頭痛
- カ 増加      キ 着席      ク 強風      ケ 上空      コ 豊富

問二 空欄Ⅰ・Ⅱに入る言葉としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

- ア では      イ そして      ウ だから      エ でも      オ つまり      カ あるいは

問三 傍線部①「外からの力が加わった場合」とありますが、どのような場合を指していますか。解答欄に合うように、十字程度で二つ説明しなさい。

問四 傍線部②「話者みずからがその言語を話さないことを選ぶ」とありますが、この事例についてまとめた次の表の空欄X・Yにはどのような説明が入りますか。それぞれ二十五字以内で説明しなさい。

現象	その影響	結果
方言は地位が低いとされる。	方言を話す人への差別が起きた。	X
↓	↓	↓
地位の高い言語を話す人は社会で成功しやすい。	若い世代が威信の高い言語を話す。 Y	地方の言語が衰退する。

問五 傍線部③「英語との関係で見れば、全く安泰というわけでもありません」とありますが、なぜですか。その理由としてもっとも適当なものの中から選んで、記号で答えなさい。

ア 英語を話すようになることで、日本語独特の方言がますます失われていくから。

イ 英語と比較すると、日本語は文法が難しすぎるために使われなくなってしまうから。

ウ 英語を小学校から勉強することで、日本語を話すことができなくなってしまうから。

エ 英語が日本社会に進出することで、日本語が公の場から排除はいじょされてしまう恐れがあるから。

オ 英語が広まることによって、日本語の文法が変化してしまう可能性があるから。

問六 傍線部④「社内の公用語を英語にする企業が出てきたり、一部の大学の講義が英語で行われたりしています」とありますが、なぜですか。その理由を解答欄に合うように、本文中から二十字以上二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑤「意味のない暴論」とありますが、なぜ筆者は「意味のない」と考えているのですか。筆者がそのように考える理由を五十字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容の説明として適当なものにはA、不適当なものにはBを、それぞれ解答欄に答えなさい。

ア 言語は親しい人とだけ通じるような表現をもつ一面もあり、仲間内の言葉が生まれるのは当然のことである。

イ どの言語であってもいつかは自然に消滅してしまうものだから、消滅の危機から守ろうとする努力には意味がない。

ウ 日本人が英語を学ぶのはむだであり、英語に時間を費やすより日本語を消滅の危機から守る努力をすべきである。

エ 言語の消滅とは単に言葉が使われなくなるだけでなく、その言葉に含まれていた文化や価値観も失われてしまう。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 良<sup>い</sup>シ<sup>セ</sup>イで学<sup>び</sup>習<sup>す</sup>るよ<sup>う</sup>心<sup>が</sup>け<sup>よ</sup>う。
- ② 花<sup>火</sup>大<sup>会</sup>な<sup>の</sup>でリ<sup>ン</sup>ジ<sup>列</sup>車<sup>が</sup>走<sup>る</sup>。
- ③ 学<sup>級</sup>会<sup>で</sup>テイ<sup>ア</sup>ン<sup>し</sup>た<sup>意</sup>見<sup>が</sup>取<sup>り</sup>入<sup>れ</sup>ら<sup>れ</sup>た。
- ④ チ<sup>ー</sup>ム<sup>に</sup>逆<sup>転</sup>勝<sup>ち</sup>を<sup>も</sup>た<sup>ら</sup>し<sup>た</sup>彼<sup>は</sup>ま<sup>る</sup>でキ<sup>ュ</sup>ウ<sup>セ</sup>イ<sup>シ</sup>ユ<sup>だ</sup>。
- ⑤ 手<sup>を</sup>挙<sup>げ</sup>て順<sup>番</sup>に考<sup>え</sup>を<sup>ノ</sup>べ<sup>る</sup>。

[国語の問題はここまでです。]



